田村俊子『木乃伊の口紅』に関する一考察*

阿武正英**
anno@smu.ac.kr

<目次>

1. はじめに
2.『木乃伊の口紅』の時代
3. 先行研究
4.『木乃伊の口紅』の女性像
5. おわりに

主題語: 自立(Independence)、性役割分担(Sex role allotment)、良妻賢母(Good wife and a wise mother)、個人主義(Individualism)、書くこと(Writing)、加害意識(Doing damage to awareness)

1. はじめに

人間にとって「自立」とは一体何を意味するのであろうか。人間として生を受け、親の庇護のもと学齢期を迎え、やがて成人し、何らかの職に就く。親から独立、または結婚し、自らの家庭をつくる。このように生まれ成人し、自ら生計を立て、あるいは家庭をきずくまでを「自立」する過程と考える傾向がある。このように「自立」ということばは、生活形態や経済的側面で考えられることが多く、結婚後、主婦として家庭内労働に従事することの多かった女性にとっては男性に比べて不利な立場に置かれてきた。ちなみに、『広辞苑』には「自立」について、「他の援助や支配を受けず自分の力で身を立てること。ひとりだち」と記されている。

近代初期の封建的な男女関係の色濃い日本において、田村俊子は「職業作家として自立した[1]」数少ない女性作家のうちの一人と評されている。今から100年ほど前に『大阪朝日新聞』の懸賞小説に入選した『あきらめ』(1911)を皮切りに、1910年代に矢継早に代表作を発表した。その中で、女性という立場で、女性にとって「自立」とは何かという問題を意識的で

* 本論文は2011年度祥明大学校・校内研究費の支援によるものである。
** 祥明大学校 師範大学 日語教育科 助教授 近現代日本文學專攻.
1) 小田桐秀雄(1987)「解説」『田村俊子作品集・１』オリジン出版センター、p.431

あれ、無意識的であれ、作品を通して追求した作家であった。

すでに筆者は俊子の1910年代前半の『あきらめ』『生血』『誓言』『女作者』の女性主人公のあり方を取り上げ、「凹型の自我から凸型の自我へ」の変遷過程として捉える論文を発表している[2)]。そこで、本稿では前回論じられなかった『木乃伊の口紅』を中心に、女性主人公のあり方を引き続き検討していく。また、女性にとって「自立」とは何か、人間にとって「自立」とは何か、という問題意識を基軸に据えながら、論じていくことにする。

2. 先行研究

宮本百合子は田村俊子を「明治40年代」の「チャンピオン」と評しているが、戦前に発表された同じ文章の中で、『木乃伊の口紅』について次のように語っている。

> 「あきらめ」につづいて、「誓言」「女作者」「木乃伊の口紅」「炮烙の刑」と進むにつれ、田村俊子の気質と作品とは、益々あますところなく当時のロマンティックな文学の潮流に谺(こだま)しながら、その流れのなかでも、まことに際だった一筋の赤い糸となって行った。官能を描く筆は執拗と頽廃の色を重ねつつ「女の前にだけは負けまいとする男の見栄と、男の前にだけ負けまいとする女の意地」とが、芸術上の張り合いの中で、逼迫した日常生活の気分の齟齬の間で、苦しく悶え合う姿をおおうところなく描いた。それらの作品が、当時にあっていかに独特、それでいて共感と刺戟を与える存在であったかは今日でも尚十分に推察出来る。「木乃伊の口紅」は、そういう意味で、血のしたたるような作品であると思う[3)]。

このように『木乃伊の口紅』は俊子の他の主要作品と同様に、＜男女両性の相克＞という観点で論じられてきた。その流れを引き継ぎつつ、長谷川啓は『木乃伊の口紅』について、「解題」の中で次のように解説する。

> ……「男の生活を愛する事を知らない女と、女の芸術を愛する事を知らない男」の確執を描

2) 拙稿(2005)「田村俊子作品の女性像に関する一考察-凹型の自我から凸型の自我へ」『日語日文学研究』第55輯2巻、pp.349-367

3) 宮本百合子(1939)「分流」、『文芸』、http://www.aozora.gr.jp/cards/000311/files/2927_9212.html(検索日:2011.12.5)

き、夫に順応しないばかりか自分の生の意味を芸術に求める妻が、彼女自身の力で自立にむかって離陸する内的光景を表出させている[4]。

すでに出世作『あきらめ』において、主人公富枝は自ら願う劇作家の道を結局は家族のためにあきらめることになるが、『木乃伊の口紅』の主人公みのるの場合は、結婚後の生活のなかで芸術家として自己実現に向かおうとする姿が描き出される。水田宗子は『あきらめ』から『木乃伊の口紅』にいたる一連の小説群が、「俊子の作家としての自己出産をテーマにしている[5]」と論じている。先の「自立にむかって離陸する内的光景」は「自己出産」の内的光景とニュアンスは異なるが重なる。また、水田宗子は次のように記している。

俊子の作品を現在でも読み応えのあるものにしているのは、女性の自己表現への苦悩をテーマとして描いたことにある。戦前の日本の家父長制家族の束縛の中で、女性たちがなぜ「書くこと」に、自我と自意識の発露を求めたかを、田村俊子の作品ほど明確に語っているものはない。その意味で、田村俊子は近代日本の女性文学の原点と言ってもいい[6]。

先に引用した長谷川の見方はおそらくみのるの職業が「芸術」ではなくても他のものに入れ替え可能なものと思われるが、水田は以前から女性が「書くこと」の意味について考察を深めてきたこともあってか[7]、作家という点が強調されている。先にも触れたように文章によって自己表現ができる高等女学校出身の女性が生まれるようになったという事情とも無関係ではあるまい。女性が「書くこと」と関連して、水田宗子はさらに次のように論じている。

戦前の女性にとって、作家になることは「自分自身になる」ことを意味した。それがきわめて困難なことであったのは、そのために女たちはまず、結婚や血縁関係が作り上げている家父長制家族の頸木から逃れ、慣習や規範や役割として自分たちを束縛している、ホモ

---

4) 長谷川啓(1987)「解題」『田村俊子作品集・１』オリジン出版センター、p.449
5) 水田宗子(2005)「ジェンダー構造の外部へ―田村俊子の小説」、渡辺澄子編『今という時代の田村俊子―俊子新論』至文堂、p.133
6) 注５)、p.133
7) たとえば水田宗子(1993)は「女性が書くということは、必然的に先行する文化のテキストとの葛藤を孕み、制度への挑戦や秩序の破壊へ向かう」と論じている。(『物語と反物語の風景―文学と女性の想像力』田端書店、岩淵宏子・北田幸恵・高良留美子編『フェミニズム批評への招待―近代女性文学を読む』學藝書林、1995、p.66より再引用)

ソーシャルな共同体の構造から身を離して、女である自分の欲求を社会の中で確保しなければならなかったからである。恋愛による性的な充足への欲求と、文学(書くこと)による社会的な認知と経済的(職業的)な自立は、家父長制社会の役割と規範から自由になることを希求する、女の自意識と自我の主張にとっては、具体的な道と考えられたのである[8]。

一方で、芸術や創作による自己表現に苦悩する女主人公みのるのあり方について、『木乃伊の口紅』においては「甘えとナルシシズムが見え隠れしており、客観的に見れば同情されるべきは男の方であろう[9]」という指摘もある。また、山崎真紀子は当時の「新しい女」という言説を取り上げ、「みのるが夫・義男に対して「男と云うものの力」を期待するのを諦め、ただ情愛で義男に繋ぎとめられているのと対照的に、義男が妻みのるに「力」を求めていること」に注目し、次のように論じる。

義男がみのるに対して夫を立て黙って従う女性像を求めていると先に論じたが、その要素を残しながらも旧道徳の制度内にはみられない女性に対して「力」を求め始めている。みのるはとりたてて＜新しい女＞という自覚はないと思われるが、義男には＜新しい女＞を求め始めている兆しが表れているのである[10]。

ここで論じられた「力」とは経済力のことであろうが、山崎はみのるとともに義男にもこれまで以上に注目した。そして、みのるが求めた「力」については、「腕力でも暴力でもなければ、経済力でもなく、自分自身を支配するのは自分自身の力である、と認識する力であった」と結論づけた。これらの論を踏まえながら、みのるのあり方を中心に読み直してみよう。

3.『木乃伊の口紅』の時代

俊子は平塚らいてうが女性だけの雑誌を作りたいと創刊した『青鞜』(1911~16)の賛助員となり、そこに作品を発表していたが、当時の良妻賢母主義[11]の風潮の圧力を受けながら創

8) 注５)、p.133
9) 関谷由実(2005)「＜戦闘美少女＞の戦略　「木乃伊の口紅」の＜少女性＞」渡邊澄子編『今という時代の田村俊子―俊子新論』至文堂、p.183
10) 山崎真紀子(2005)『田村俊子の世界作品と言説空間の変容』彩流社、p.167

作活動を続けていたと察せられる。たとえば『木乃伊の口紅』が『中央公論』に発表された1913年4月に、文部省は婦人雑誌の「反良妻賢母主義的婦人論」の取締りを決定している。すでに12年の4月、『青鞜』は初の発禁処分を受けているが、翌13年には『青鞜』のほか『女子文壇』『女学雑誌』などの婦人雑誌も発禁処分を受けている。

1890、91年に初版(文部省総務局図書課発行)、1903年に修訂版(大日本図書発行)が出された佐藤誠実『日本教育史』の「女子教育」と題する頁には、女子の才を「裁縫」などの家事と「琴」「踊」などの芸事に限定し、「彼漢籍を読み、詩文を作るが如きは、極めて、稀なる事にて、其父母たる者、多く之を戒めたり。謂ふ其心高挙して、夫を凌ぎ、人に驕りて、其身に利あらず」[12]と記されている。すなわち、女性が「詩文を作る」ことを「極めて稀なること」と諌め、高慢になって「夫を凌」ぐようなことをしたり、「人に驕」ったりしては自分のためにならないと教育されていた。

俊子は1884年に東京浅草蔵前で米穀商の家に生まれ、1900年に東京府立高等女学校を卒業し、創立されたばかりの日本女子大学校の一期生として入学するが病気で中退し、小説家を志して幸田露伴の弟子となる。当時の女性としては珍しく一貫して公的な教育を受けた俊子も、個人の自我の実現など人権思想の影響とともに、良妻賢母主義教育の影響も免れることはできなかっただろう。

しかし、高等女学校の教育は良妻賢母の枠内に女性たちを押し込めるものであった半面、文章によって自己表現することができる女性たちを生み出すものであった。日露戦争後に女性雑誌の創刊が相次いだのも、これら高等女学校卒の女性たちの登場を背景とする[13]。

当時の女学校で教育を受けた女性たちについて、宮本百合子は次のように回想している。

> 水野仙子にしろ、その他の婦人たちにしろ故郷の生家は其々の地方で所謂相当な生活を営む中流的な旧家が多かった。経済的にも文化的にも、娘たちを女学校へ出すだけのゆとりもあり、開化もしていたのであろう。が、いざ女の子がそれ以上進んで文学の仕事をしたい、勉強したいと言えば、そんな若い女の熱心そのものが周囲を驚愕させるような封建性は、強い枷となって地方文化のうちに生きた威力を逞しくしている。そのような家の空

---

11) 「良妻賢母」は近代に入って生まれた概念で、「男は仕事、女は家庭」という性別役割分担を前　提とした「良妻」の要素と、国民養成のためにその能力を備えた「賢母」の要素をあわせ持つ女性　像と考えていいだろう。

12) 佐藤誠実(1973)『日本教育史２』、東洋文庫236、平凡社、p.144-145

13) 大門正克・安田常男・天野正子編(2003)『近代社会を生きる』吉川弘文館　参照

気、家長的な圧迫に抗する情熱は、生活力に溢れるそれらの婦人たちを様々な形で故郷に背かせただろう。父兄の圧政は、やがて女としてめざめた眼に夫の妻への専制とつづいて周囲や我身の上に目撃されるようになったろう。周囲の現実をあるがままに見れば、女として伸びたい心の痛切な叫びは高まって、而も、封建の要素を多分にもたらした社会の構成からもたらされている非人間的な条件の本質を理解する迄には成長していなかったこれらの婦人たちが、その鬱憤を男に向けて、男の専横から女性の解放という方向に赴いたことは、その時代の、それらの婦人たちの生活や環境教養から推して十分に肯ける[14]。

宮本百合子の言説が、戦後の地点からなされたものであったとしても、当時の家父長制に基づいた偏った性差社会において、一部の女性たちの抑圧への不満は胎動し始めていたことに疑いあるまい。

その周辺の状況を見ると、新民法公布後、1910年から11年にかけて大逆事件による検挙者が処刑に至る国家権力の強権化がピークに達し、その間、社会主義への取締りは自由な言論活動にも圧迫を加えていた。そのような時代に、いや、そのような時代だからこそ、個人の自由を求めて個人主義的な思潮が表れはじめる。

周知のように、『木乃伊の口紅』は幸田露伴の門下であった俊子と田村松魚が結婚して2年目になる1910年の初めから、新聞懸賞小説に応募するため『あきらめ』を書き上げ、入選する1910年11月までの期間を題材にしているので、私小説として読まれてきた。しかし、『木乃伊の口紅』が発表された時期は『青鞜』が発刊(1911)され、女性解放の言説が文壇に新風を吹き込むようになってから2年が過ぎており、それらを含む当時の個人主義の言説の影響を受けながら、再構成し虚構化されたものと見ていいだろう[15]。

当時の個人主義とは『青鞜』に先立って、白樺派の青年作家たちの自我主張の舞台となった雑誌『白樺』(1910)、森鴎外の小説『青年』(1910~11)、個人主義の哲学的主張ともいえる西田幾太郎の著作『善の研究』(1911)、さらには夏目漱石の講演「私の個人主義」(1914)、大杉栄のエッセイ「近代個人主義の諸相」(1915)など、それぞれの立場やニュアンスの違いはあってもそれぞれの考えが主張され、その実践方法が模索された。また、この個人主義は先に述べた良妻賢母主義と食い違う面を持っていたのである。

森鴎外の『青年』の大村は主人公の純一に個人主義について次のように主張する。

---

14) 注３)

15) 山崎真紀子(2005)『田村俊子の世界作品と言説空間の変容』(彩流社)は「青鞜」の「新しい女」に関する言説を取り上げながら、作品を読み解いている。pp.160-161

個人主義は個人主義だが、ここに君の云う利己主義と利他主義との岐路がある。利己主義はニイチエの悪い一面が代表している。例の権威を求める意志だ。人を倒して自分が大きくなるという思想だ。人と人とがお互いにそいつを遣り合えば、無政府主義になる。そんなのを個人主義だとすれば、個人主義の悪いのは論を須たない。利他的個人主義はそうではない。我という城郭を堅く守って、一歩も仮借しないでいて、人生のあらゆる事物を領略する。君には忠義を尽す。併し国民としての我は、昔何もかもごちゃごちゃにしていた時代の所請臣妾ではない。親には孝行を尽す。併し人の子としての我は、昔子を売ることも出来た時代の奴隷ではない。忠義も孝行も、我の領略し得た人生の価値に過ぎない。日常の生活一切も、我の領略して行く人生の価値である。

大村がいう「利他的個人主義」とは、いわば日本における封建的道徳と国民国家の理念を肯定的に取り込んだ個人主義である。これに対して、純一は「何だかゆう博士の説」だと断った上で次のように応じる。

個人主義は西洋の思想で、個人主義では自己を犠牲にすることは出来ない。東洋では個人主義が家族主義になり、家族主義が国家主義になっている。そこで始て君父のために身を棄てるということも出来ると云うのですね。こう云う説では、個人主義と利己主義と同一視してあるのだから、あなたの云う個人主義とは全く別ですね。それに個人主義から家族主義、国家主義と発展してきたもので、その発展が西洋に無くって、日本にあると云うのは可笑しいじゃありませんか。

純一は大村が唱える自己を犠牲にできる「利他的個人主義」に対して、自己を犠牲にできない西洋の個人主義との違いを述べ、西洋の思想が西洋よりも日本で「発展」しているという「可笑し」さを指摘する。大村はそれを否定せず、反論することもなく、次のように語る。

遠い昔に溯って見れば見るほど、人間は共同生活の束縛を受けていたのだ。それが次第にその羈絆を脱して、自由を得て、個人主義になって来たのだ。お互いに文学を遣っているのだが、文学の沿革を見たって知れるじゃないか。運命劇や境遇劇が性格劇になったと云うのは、劇が発展して個人主義になったのだ。今になって個人主義を退治しようとするのは、目を醒まして起きようとする子供を、無理に布団の中へ押し込んで押さえていようとするものだ。そんな事が出来るものかね。

大村は「利他的個人主義」についてはそれ以上触れず、日本における個人主義の必然的な趨勢を論じる。一方、夏目漱石は「私の個人主義」と題して学習院の学生に対して行った講演の中で、次のように語っている。

> 第一に自己の個性の発展を仕遂げようと思うならば、同時に他人の個性も尊重しなければならないという事。第二に自己の所有している権力を使用しようと思うならば、それに付随している義務というものを心得なければならないという事。第三に自己の金力を示そうと願うなら、それに伴う責任を重んじなければならないという事。

漱石の言は自らの個人主義が他者のそれを尊重するという条件下に成立することを示していて、すぐ後の作品『道草』(1915)において、そのような観点から妻に対する夫のあり方が内省的・批判的に捉えなおされている。それゆえに鴎外が大村に言わせた「利他的個人主義」よりもさらに進んだものとなっている。ともあれ、鴎外も漱石も当時の日本において、個人主義の流れを必然的なものと受けとめ、いかにして日本の風土に個人主義の思想を根づかせるかについて思索を巡らしていたと言えるだろう。

以上見てきたように、『木乃伊の口紅』は良妻賢母主義と個人主義がとも思潮として並立する時代のもとに表われた作品であった。

4.『木乃伊の口紅』のみのる

『木乃伊の口紅』は13章まであるが、作品内時間は「１月初め」(1章)に始まり、「桜の咲く頃」(4章)、「4月末」(5章)、「初夏」(6章)、「８月半ばを過ぎてから」(9章)、「11月半ば」(13章)とあるように、ほぼ1年のうちに収められている。先にも少々触れているが、「年譜」によるとその期間は俊子の実生活では1910年の出来事と重なる[16]。この時期の東京府下谷区谷中天

16) 1909年(26歳)　５月、米国から帰朝した昌新田村松魚と結婚(法律的には入籍していない)。下谷区谷中天王寺町十七番地に新居をいとなむ。
1910年(27歳)　生活逼迫し、夫婦喧嘩がたえなくなる。夏のはじめ、松魚に強制され、大阪朝日新聞の懸賞小説に応じて「あきらめ」を書き上げ、町田とし子の名で投稿する。８月半ば、中村春雨(吉蔵)主催の新社会劇団に参加。10月、本郷座における「波」の女主人公豊子を演じ、好評をはくしたが、上演後劇団が解散し、これが女優として最後の舞台となる。11月11日、懸賞小説の発表があり、「あきらめ」が2等当選。1等の該当作がなかったため、首位となり、賞金1千円を獲得。11月、「私の扮した女音楽師」を『歌舞伎座』に、12月、喜劇「やきもち」を『文芸倶楽部』に発表。

王寺町十七番地の新居での松魚との新婚生活について、福田はるかの評伝[17]にも紹介されているが、年譜(脚注16)参照)に記された事項、たとえば生活逼迫、主人公として演劇への出演、夫に強制され懸賞小説へ応募・当選など、主要事項は小説のうちにそのまま導入されている。瀬戸内寂聴によると、結婚前の俊子と松魚については、共に幸田露伴の弟子として、俊子が18歳の時、6歳年上の兄弟子であった松魚に初恋を感じたという。松魚が渡米し、7年間苦学して帰国するまで、俊子は松魚を待ち続け、初恋を貫き結婚した。当時としては珍しい恋愛結婚であり、新婚当初は結構幸せで作品のようにギクシャクしたものではなかったようだ。俊子は一応主婦役を勤め、夜は松魚に英語を習ったりした。夫婦の不幸の発端は、俊子が文壇で名を成すにつれ、松魚はフェミニストの内助の夫から、卑屈な紐になり下がっていった点にある、という[18]。問題は作品が事実と合っているかではなく、どのように描かれているかであるので、参考にとどめることにして、小説の冒頭から見ていくことにしよう。

冒頭は1月初めの夕暮れ時、みのるは自宅の2階で夕飯用に豆腐を買いに出なければと思いながらも物憂くて出られず、夕空を眺めている場面からはじまる。やがて仕事を探して外を回っていた夫の義男が帰宅し、夕飯の準備に取りかかる。みのるは食事を取らずに夫の帰りを待ち、何の成果も無く帰宅した夫に対し、小言を言うこともなく「いいわ。仕方がないわ」(1)と言って「可哀想」(同)に思う。夕飯の買い出しをせず、ぼうっと夕暮れを眺めているのは主婦として怠慢と言われるかもしれないが、夕飯をとらずに夫を待ち、何の成果も出せないことに対しても責めたてたりしない。しかし、芸術への憧憬を深く内に抱え込んで主婦として、また生活者として、どこか地に足のついていない感じである。

夕飯後、みのるの衣類を質入れするため、雨の中、夫婦で出かけるが、用を済ませた後、義男はみのるの笑顔を「底をふくんでいるような鋭い影を走らしていたと思っていやな気」(2)がする。これは妻を養えない義男のひがみからくる妄想であるが、すぐ後に洋食屋に入ってから、みのるは義男のいじけきった態度に対して肩で突きながら「見っともない風をするもんじゃないわ」(同)と諭す。それに対して義男の気持として「こんな場合にも自分だけは見窄らしい風はしまいという様に白粉くさい張り気を作って自分の情緒を臙脂のように彩らせようとしている女の心持がいやであった」(2)と語られる。

1911年(28歳)　１月1日から3月31日まで、『大阪朝日新聞』に「あきらめ」が連載され、本格的に文壇に登場。

―田村俊子(1988)「年譜」、『田村俊子作品集・3』オリジン出版センター、p.448-449

17) 福田はるか(2003)『田村俊子　谷中天王寺町の日々』図書新聞出版.

18) 瀬戸内寂聴(1988)「解説」『田村俊子作品集・3』オリジン出版センター、p.424

そこで、義男には「僅かの間同棲して暮した商売上りのある女」(2)の記憶が呼び出され、「貧しい時には同じ様に二人の身の上を悲しんで、そうして仕事に疲れた義男を殆んど自分の涙で拭ってくれるような優しみを持っていた」(同)と相対化される。俊子の分身でもあるみのるはこの「商売上がりの女」より家柄もよく教育のある女に違いないが、そのぶん世間に対する虚栄心や自尊心も強く、落ち込んでいる男が女に期待するような情愛に欠けている。みのるは思っていることをさらっと口に出す性格で、夫に深く寄り添って同情したり、夫を立てようとすることはなく、夫の自尊心を傷つけていく。

生活苦に喘いでいるこの時点で、みのるは「自分も何かしなければならないと云う取りつめた考えによく迫られ」(3)ながらも、「何も働く事が出来」(同)ず、「自分の内臓を噛み挫いでもやり度いほどの口惜しさばかりはあっても」(同)何もできず、「矢っ張りこの力のない男の手で養ってもらわなければならなかった」(同)と語られ、語り手はみのるが自身の無力感に苛まれているように語る。そして、「毎日お互を突っ突き合う様な争いの絶えた事のない日を振り返」(3)りながら、義男に対して「自分の紅総のように乱れる時々の感情を、その上にも綾なしてくれるなつかしい男の心と云うものを見付け出す事が出来なかった」(同)と、揺れる女心をやさしく包んでくれた以前の男心が失われていることが語られる。

やがて「桜が咲く頃」(4)に義男が職を見つけると、みのるは毎朝停車場まで見送りに出て、時には電車の中の義男に向けて「恋人のように女の唇からキスを送る」(同)こともあった。しかし、経済的に困難な状態は続き、その中でもみのるは一日おきのように髪結のところに髪を結いにでかけるようになる。つまり、経済観念が欠けており、自身の美容を優先して節約をすることができない。みのると義男の師匠の奥さんの葬儀に関連した5、6章を経て後半の7章から、2人の争いも激しさを増すようになる。

> 粘りのない生一本な男の心の調子と、細工に富んだねっちりした女の心の調子とはいつも食ひ違って、お互同士を突っ突き合うような争いの絶えたことはなかった。女の前だけに負けまいとする男の見栄と、男の前にだけ負けまいとする女の意地とは、僅の袖の擦り合いにも縺れだして、お互いを打擲し合うまで罵り交わさなければ止まないような日はこの二人に珍しくなかった。(7)[19]

たとえば2人が書物に対する理解の違いから言い争いになったときは、みのるも一歩も譲

19) 作品の引用はすべて田村俊子(1987)『田村俊子作品集１』(オリジン出版センター)に拠った。なお、旧仮名遣いを出来る限り現代表記になおした。

らず、「自分の身体の動けなくなるまで男に打擲されなければ黙らなかった」(7)。

> 「あなたが悪いのに何故あやまらない。何故あやまらない。」
> みのるは義男の頭に手を上げて、強いてもその頭を下げさせようとしては、男の手で酷い目に逢わされた。(7)

この時代に妻が夫に対してここまで反抗的に描かれるのは珍しい例になるかもしれない。しかし、義男がみのるに懸賞小説に応募するよう強制したとき、抵抗を重ねながらも、結局は書かなければ別れようという義男の前に屈してしまう。そのような状態を次のように表現している。

> 矢っ張り唯一人の義男の情に縋って行かなければ生きられない様な自らの果敢のない悲しみを、みのる自身が傍から眺めている様な心の態度で自分の身体を男の前に投げ出して了うのが結局だった。(8)

これは夫への依存心を断ち切れず、本然の自己ではない偽りの自己であることを知りつつも生きていかざるを得ない状況を言っているのだろう。そのように夫に強制されながらみのるは小説を締切までに書き上げるが、その作品からは「自分が考えている様な美しい芸術の影なぞは少しも見られ」(9)ず、「失望しずにはいられなかった」(同)。義男にとってみのるに小説を書かせるのは、生活のためであって、みのるのように芸術的な完成度については意を介さず、運がよければ懸賞に当たると思っている。二人の争いの根は「男の生活を愛さない」(7)妻と「女の芸術を愛することを知らな」(同)い夫の間の人生の目的観の違いにある。さらに、みのるにとって創作とは本然の自己に生きること、そのものであったろう。

懸賞小説を無理して書き上げた後、今度は舞台女優の仕事を再開すると言う。今度のみのるは男の力に屈せず、反対する夫を押し切って、次のように義男に語る。

> それならよござんす。私は私でやりますから。あなたの為の芸術でもなければあなたの為の仕事でもないんですから。私の芸術なんですから。私の仕事なんですから。然う云う事であなたが私を支える権利がどこにあります。あなたがいけないと云ったって私はやるばかりですから。(9)

このように言い放ち、「自分を見縊るこの男を舞台の上の技芸で、何でも屈服さしてやら

なければならない」(9)と思う。難しい主役を得て、稽古を重ね、上演された劇とみのるの演技は好評を博するが、「容貌の醜」(11)さから、女優には向かないことを思い知らされることになる。みのるの「放縦」(12)のせいで「身惨めな窮乏」(同)に瀕していると考える義男との生活はさらに破綻へと傾斜していく。しかし、みのるは義男が望むように「平凡な生活に甘んじて行」(同)くような生き方に同調できない。彼女には求めてやまない芸術への憧憬があったのだ。その思いは次のように語られる。

> 10何年の間、みのるは唯ある1つを求める為に殆んど憧れ尽した。何か知らず自分の眼の前から遠い空との間に1つの光るものがあって、その光がいつもみのるの心を手繰り寄せようとしては希望の色を棚引かして見せた。……
> (中略)
> ……みのるは矢っ張りその一縷の光りを追い詰めていたかった。然うしてその追い詰めつつゆく間に矢っ張り自分の生の意味を含ませて見たかった。(12)

ところが、２人が別れることを決断してから、みのるは「自分の傍から急に道連れの影を失うのが、心細くて堪ら」(12)ず、「今まで長く凭れていた自分の肌の温みを持った柱から、辷り落されるような頼りなさが、みのるの心を容易に定まらせなかった」(同)と語られる。

それが別居する直前になって、懸賞小説の入選の知らせと千円の賞金が入り、経済的苦境から脱し、別れを踏み止まることになる。義男が得意になってみのるに強調するように、好むと好まざるとに関わらず、作家としてのみのるの「出産」を助ける産婆役は夫の義男が果たしていることもみのるは認めている。

> 「誰れの為たことでもない、僕のお蔭だよ。僕があの時どんなに怒ったか覚えてゐるだらう。君がとうとう云ふことを聞かなけりやこんな幸福は来やしないんだ。」
> 義男自身がみのるに幸福を与へたかのやうに義男は云ひ聞かせた。
> (中略)
> ……義男に鞭打たれながらああして書き上げた仕事が、こんな好い結果を作つた事を思ふと、みのるは義男に感謝せずにはゐられなかつた。
> 「全くあなたのお蔭だわ。」
> みのるは然う云つた。この結果が自分に一つの新規の途を開いてくれる発端になるかも知れないと思ふと、みのるは生れ変つた様な喜びを感じた。(13)

みのるは、作家として認められていない義男よりも力関係において優位な立場に逆転しながらも、「義男に強いられて出来た仕事」(14)、「義男の鞭打った女の仕事」(同)と繰り返し語り、彼の功績を認めている。しかし、いつまでもその功績に取りすがろうとする義男と、新しい目標に進んで行こうとするみのるの間に、たちまち意識のずれが生じるようになる。懸賞小説の入選を契機に、みのるは急速に変わっていく。

> その後みのるは神経的に勉強を始めた。今までともすると眠りかけそうになったその目がはっきりと開いてきた。それと同時に義男と云うものは自分の心から遠くなっていった。義男を相手にしない時が多くなった。義男が何を云っても自分は自分で彼方を向いている時が多くなった。みのるを支配するものは義男ではなくなった。みのるを支配するものは初めてみのる自身の力になってきた。(13)

ここに至って、みのるは義男に依存した自身から自立した自身へと「生まれ変」(13)わり、文芸の仕事のうちに「自分の生の意味」(12)を見いだしたのである。「みのるを支配するもの」(13)が義男ではなくなり、「自身の力になってきた」(同)と自覚される。これは経済的自立よりもさらに深い精神的自立に向かい始めたと言っていいだろう。その際大切だったのは山崎真紀子も言うように、金銭ではなく芸術を第一の目標とすることで、「自分の書いた作品の芸術面での社会的な評価[20]」だった。もちろん、自立という点では、懸賞小説に入選することによって金銭を得ることができたという経済面を軽視すべきではなく、それも確かにみのるに自立への自信を与えたと考えられる。しかし、何よりもみのるは「書くこと」によって、「自分の生の意味」を見いだすとともに、本然の自己を生き始めることによって、良妻賢母主義に彩られた「女性」という枠を超えた人間としての真の自立への道に進み出たのである。

5. おわりに

本稿は、まず田村俊子の『木乃伊の口紅』の時代について、良妻賢母主義と個人主義が思潮として並立する時代であったことを確認した。その上で、作品を読みなおし、女主人公

---

20) 注10) p.168

みのるから、夫・義男との相克の中で「書くこと」によって、夫に支配されたあり方から自身で自身を支配するあり方へと目覚めていく様相を把握することができた。それはまさにみのるが本然の自身を生きることに通じており、良妻賢母主義が「女性」の規範として根強い時代において、「女性」という枠を超えた人間としての真の自立への道に進み出ようとした軌跡であった。

また、このようなみのるのあり方は男性との相克関係において、被害意識を持ちがちな女性のあり方とは異なっていて興味深い。その点と関連して、現代作家の山田詠美が次のように語っていたことを思い出す。

> 女の人の書く小説は被害意識から出来ているものがすごく多いと思う。でも、女性が加害意識を持ったそういう小説があってもいいんじゃないかと思う。そういう小説は女の人が精神的に自立していないと考えられない[21)]。

つまり、『木乃伊の口紅』は「加害意識」を持って書かれたのではないだろうか。この作品は社会的に認められるようになったみのるが義男の性格に愛想をつかして相手にしなくなり、夫婦関係は辛うじて維持されながらも義男が取り残されるような形で終わっている。全編14章のうち、12章まではみのるよりも義男の方が関係性において優位に立ち、しばしばみのるが泣いていたのだが、13章の懸賞小説入選を境にその状況が逆転するのだ。最終章の14章では「義男の憎んだみのるの高慢は、この頃から義男の見えないところに隠され」、「其の隠された場所で一層強く働いていた」と書かれた上で、次のように義男の心情を描く。

> 少しずつ義男の心に女の態度が染み込んでいった。男を心から切り放して自分だけせっせとある階段を上って行こうとする女の後姿を義男は時々眺めた。あの弱い女がこうしてだんだん強くなってゆく―その捩じ切った様に強くなった一つの動機は矢っ張り発表された例の仕事の結果だとしか思われなかった。然うした自覚の強みを与えたものは矢っ張り自分だと思った。
>
> けれども義男は何も云わなかった。みのるの為た仕事は何うしてもみのるの仕事であった。みのるの芸術は何うしてもみのるの芸術であった。みのるは自分の力を自分で見付けて動きだしたのだ。義男はそれに口を挿むことは出来なかった。義男はそう思った時、この女から一足一足に取り残されてゆくような不安な感じを味わった。(14)

---

21) 山田詠美(1990)『カンバスの柩』新潮社、pp.164-165

先に述べたように、この小説の大半はみのるが泣かされる側に立っていたのだが、最終的には感じるのは、これは「被害意識」で書かれた小説ではなく、むしろ「加害意識」を持って書かれた小説かもしれないということだ。このような点からも『木乃伊の口紅』は先駆的な女性小説であった。

最後の場面では、みのるは男女の鼠色の木乃伊が上下に重なり合って硝子箱に入っているのを自ら傍で眺めるというおもしろい夢を見て、その様子を描こうと机に向かい、それに義男は無関心で犬の身体を櫛で掻くところで終わっている。これは女が仕事に向かい、男がペットの世話をするという図で、当時の家父長制と良妻賢母主義を反映した性役割分担の逆を示しており、興味深い。このような時代を逆らった男女関係は、男も女も死んで木乃伊になれば男も女もない、せいぜいその違いは口紅をしているかどうかでしか区別はつかず、生きているときは性役割分担など入れ換え可能であることを暗示していると読むことはできないだろうか。

【参考文献】

阿武正英(2005)「田村俊子作品の女性像に関する一考察-凹型の自我から凸型の自我へ」『日日文学研究』第55輯2巻
今井泰子・薮禎子・渡辺澄子編(1987)『短編　女性文学　近代』桜楓社
岩淵宏子・北田幸恵・高良留美子(1995)『フェミニズム批評への招待―近代女性文学を読む』學藝書林
小田切秀雄(1987)「解説―田村俊子の三回の復活、文学史・女性史上の位置」、『田村俊子著作集１』オリジン出版センター
尾形明子(1984)『作品の中の女たち　明治・大正文学を読む』ドメス出版
国岡 彬一(1976)「「木乃伊の口紅」論」『国文白百合』７号
佐藤誠実(1973)『日本教育史２』東洋文庫236、平凡社
大門正克・安田常男・天野正子編(2003)『近代社会を生きる』吉川弘文館
中山和子・江種満子・藤森清編(1998)『ジェンダーの日本近代文学』翰林書房
長谷川啓(1987)「解題」『田村俊子著作集１』オリジン出版センター
宮本百合子(1939)「分流」『文芸』、http://www.aozora.gr.jp/cards/000311/files/2927_9212.html(検索日:2011.12.5)
村松定孝・渡辺澄子編(1990)『現代女性文学辞典』東京堂出版
山崎真紀子(2005)『田村俊子の世界―作品と言説空間の変容』彩流社
渡辺澄子(1996)「1910年代の文学、あるいは文学状況」『女々しい漱石、雄々しい鴎外』世界思想社
_____(1998)『日本近代女性文学論』世界思想社
_____編(2005)『今という時代の田村俊子―俊子新論』至文堂

논문투고일 : 2011년 12월　10일
심사개시일 : 2011년 12월　20일
1차 수정일 : 2012년 01월　10일
2차 수정일 : 2012년 01월　16일
게재확정일 : 2012년 01월　20일

<要旨>

田村俊子『木乃伊の口紅』に関する一考察

本稿は、まず田村俊子の『木乃伊の口紅』の時代について、良妻賢母主義と個人主義が思潮として並立する時代であったことを確認した上で、作品を読みなおし、女主人公みのるから、夫・義男との相克の中で「書くこと」によって、夫に支配されたあり方から自身で自身を支配するあり方へと目覚めていく様相を把握した。それはまさにみのるが本然の自身を生きることに通じており、良妻賢母主義が「女性」の規範として根強い時代において、「女性」という枠を超えた人間としての真の自立への道に進み出ようとした軌跡であった。

また、この作品が「加害意識」を持って書かれた珍しい女性小説である可能性を探った。さらに、最後の場面は当時の家父長制と良妻賢母主義を反映した性役割分担の逆を示しており、このような時代を逆らった男女関係は、死んでしまえば男も女もなく、生きているときも性役割分担など入れ換え可能であることを暗示している。

A study on "Lipstick of the mummy" by Toshiko Tamura

At first this article identified that it was the times when individualism stood side by side as the trend of thought as the principle of good wife and a wise mother about the times of "the lipstick of the mummy" of Toshiko Tamura. With that in mind, I grasped the aspect that woke to the way to rule over own in own from the way ruled over to a husband in conflict with husband, Yoshio by "writing" it because I read a work again, and a heroine grew. It right grew, but I knew that I lived in own which was true and was the trace which was going to step forward on the way to the true independence as the human being beyond the frame called "the woman" in the times when the principle of good wife and a wise mother was deep-rooted as a model of "the women".

In addition, I considered the possibility that this work was a rare novel written with "doing damage to awareness" for women. Furthermore, the last scene shows reverse of the percent allotment to use the nature that reflected the then patriarchy and principle of good wife and a wise mother and suggests replaceable things such as sex role allotment when the man lives without a woman if the man and woman relations that I defied in such times die.